23日　日曜

使徒

13:42 二人が会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。
13:43 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちがパウロとバルナバについて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みにとどまるように説得した。
13:44 次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。
13:45 しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののしった。
13:46 そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければなりませんでした。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。
13:47 主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」
13:48 異邦人たちはこれを聞いて喜び、主のことばを賛美した。そして、永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。
13:49 こうして主のことばは、この地方全体に広まった。
13:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。

Bible Reference 聖書の記述

13:51 二人は彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオンに行った。
13:52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

福音が人々を変えてゆく様子を見ながら、パウロとバルナバは「神の恵みにとどまっているように」と勧めました。この後は自分たちが先に進んで行くので、アンテオケにはいわゆる「無牧の教会」が残されるわけですが、その教会にとって何よりも必要なのが「神の恵み」を忘れないこと。その「恵み」によって生きること、また「恵み」に感謝して、「恵み」に応えていくということと考えたのでしょう。

今日の教会には、与えられた「恵み」に感謝して「とどまって」生きるというよりも、「もっと恵みが欲しい」と求める人の方が多いかもしれません。自分自身を省みる必要がありそうです。

町中の人が集まって来たとありますから、ほとんどはユダヤ人ではない異邦人です。ユダヤ人たちは信じた者もいましたが迫害する者も多く、パウロの宣教はユダヤ人優先から異邦人世界へと、大きく展開しました。それは聖書の全体的な理解と現実に働く神のみわざによるものです。人生には新しい展開が必ず必要です。神の聖書とみわざに目を留めましょう。

パウロはが引用した聖書には、「預言者に言われているような事が、あなたがたの上に起こらないように気をつけなさい。」とあり、本人の決断が救いと滅びを分けるということが分かります。一方、４８節には「永遠のいのちに定められていた人たち」とあり、本人の決断とは関係なく救いか滅びかが決まっているような印象を受けます。

もしも救いというものすでに決まっていて、本人の信仰の決断とは関係ないものなら、宣教の意味がなくなります。また神はある人々を地獄に追いやるために創造されたことになり、神の愛の御性質そのものが崩壊してしまいます。

どこに問題があるのでしょう。問題は、人間の表現で聖書とは別に法則を作り出して、その法則にみことばを当てはめようとするところにあります。そこから果てしのない神学論争が生まれるのです。

聖書の理解の違いによって各自がに自論を持つことは避けられませんが、それに固執するのはやめましょう。むしろ弟子たちのように「喜びと聖霊に満たされて」前進しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？